

平成 29 年度 第 1 回三条市食育推進及び農業振興審議会 会議録（概要）

1 日 時 平成 29 年 10 月 20 日（金） 午後 1 時 30 分から午後 3 時 42 分

2 会 場 三条市役所 4 階 第三委員会室

3 議 題

- (1) 会長の選出
- (2) 副会長の選出
- (3) 三条市食育の推進と農業の振興に関する計画の実施状況及びスケジュールについて
- (4) 成果指標の目標値の設定について

4 出席状況

(1) 出席委員

栗生田会長、阿部副会長、神田委員、金子委員、小林委員、星野委員、今井委員、清野委員、高橋（豊）委員、高橋（敦）委員、宮島委員、山本委員

(2) 欠席委員

村山委員、外山委員、田代委員

(3) 事務局職員

近藤福祉保健部長

長谷川経済部長

健康づくり課 長谷川課長、小島室長、大泉主査、小柳主任、前田主任

農林課 藤澤課長、藤家課長補佐、長谷部係長

(4) 傍聴者 なし

(5) 報道機関 なし

5 内 容

(1) 開 会 進行：健康づくり課 小島室長（会長選出まで）

(2) あいさつ 近藤福祉保健部長

本日は三条市食育推進及び農業振興審議会に御出席いただきありがとうございます。また、快く委員をお引き受けいただき、感謝申し上げます。本来であれば、委員をお願いした直後に審議会を開催すべきでしたが、この時期になってしまったことをお詫び申し上げます。

さて、平成 27 年度末に策定いたしました三条市食育の推進と農業の振興に関する計画を昨年度から進めてきているところですが、本日は、目標に向けた平成 29 年度の取組や実施状況、成果等を含めまして、説明をさせていただきたいと思っております。生きる力の一環としての食育と、それを支える産業のひとつの農業、それが一緒になった計画ですが、まだ始まったばかりでございます。皆様に御協力いただきながら、より良いものにしていきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

(3) 委員等の紹介

(4) 議 題

ア 会長の選出 会長に粟生田委員を選出

イ 副会長の選出 副会長に阿部委員を選出

ウ 三条市食育の推進と農業の振興に関する計画の実施状況及びスケジュールについて（資料No.1、2を使って食育部分を大泉主査、農業部分を藤家課長補佐が説明）

山本委員	<p>～食育部分の質疑～</p> <p>「眠育」の意味と「ひだまり」について説明をお願いしたい。</p>
大泉主査	<p>「眠育」は、子どもたちに睡眠の大切さや重要さを教え、十分な睡眠を取らせることで生活習慣の改善を促すこと。朝食習慣にも睡眠の取り方が大きく関わっていると考えている。</p> <p>「ひだまり」は、嵐南小学校地域交流施設の愛称である。</p>
神田委員	<p>高齢者の共食推進の取組は、どのような手法で行っているのか。</p>
大泉主査	<p>通いの場整備事業は、地域の集会所等を利用し、食生活改善推進委員を中心に食事の準備や参加者の取りまとめ等を行っている。申込み方法、開催回数、食事の内容など実施手法は会場によって異なる。また、食費は参加者の負担だが、料理を持ち寄ったり、食材を持ち寄ってお汁を作ったりしているところもある。</p> <p>みんなで給食ランチ会については、主催は教育総務課。現在は、担当職員が申込みの取りまとめをし、申し込んだ方が給食を召し上がっている。食費については、参加者の自己負担である。</p>
小林委員	<p>市内に一人世帯の高齢者は、何人か。また、長期休暇に一人で家にいる子どもは何人か。</p>
長谷川健康づくり課長	<p>市内の一人暮らしの高齢者世帯数は、現在 5,077 世帯。長期休暇に一人で家にいる子どもの数は把握していない。</p>
小林委員	<p>～食育部分の意見～</p> <p>集まった人たちの食事を提供するという共食の取組は良いと思うが、一人暮らし高齢者 5,000 世帯の方、一人で食事をしている方に対する政策が何も見えてこない。考えを聞かせていただきたい。</p>
近藤部長	<p>一人暮らしの方も、自分で作って食べるということが大事だと考えている。現在の取組は、食生活改善推進委員等が作って提供するという</p>

神田委員	<p>ものが多いが、一緒に作るという方法も増やしていきたいと考えている。</p> <p>通いの場の整備事業は、モデル的に現在1、2か所立ち上がっていると思われるが、どのくらいまで増やすのか。あるいは、どのような手ごたえがあれば政策として有効と言えるのか、計画を教えてください。</p>
粟生田会長	<p>社会全体が高齢化している中で、非常に重たい課題として、御意見をいただいたが、そのような厳しい視点と、もっと広げていこうという視点と、両方の視点で行政の考えをお聞かせいただきたい。</p>
小島食育推進室長	<p>共食の取組については、高齢者の通いの場を作るという側面があり、高齢者が集まる場をより多く創設できるよう、高齢介護課や生涯学習課とともに取り組んでいる。その中でも、食は、良いきっかけであり、家庭での自炊にもつなげていきたいと考えている。</p> <p>現在は、食生活改善推進委員から運営に大きく関わっていただいているが、将来的には、地域の人たちで自主運営していけるようにと考えている。</p>
清野委員	<p>いきいきサロンは、全部で何か所くらいあるのか。また、みんなで給食ランチ会の30年度の目標について、回数ほどのくらい増やすのか、自主的な運営とは具体的にどのようなものを教えてください。</p>
長谷川健康づくり課長	<p>今現在、高齢介護課で把握している通いの場は124か所となっている。</p>
大泉主査	<p>みんなで給食ランチ会の実施回数については、最低でも月一回はできるようにしていきたいと考えている。しかし、調理場で作れる食数との兼ね合いもあるため、調整しながら増やしていきたい。自主的な運営につきましては、まずは盛りつけを参加者が行うところから始めていき、将来的には、参加者の取りまとめ等も、参加者の中でできるようにして、自己運営できるところを目指していきたいと考えている。</p>
小林委員	<p>生涯学習課で行っているきっかけの一步事業は、多くのところに働きかけをして、多くの方が参画している。参加者がその後ボランティアになり、別のかたちで関わっているという話も聞いているので、上手に情報を共有した中で、連携しながら進めていくと良いのではない</p>

	か。
大泉主査	生涯学習課と情報を共有しながら取組を進めていきたい。
清野委員	今は関心の高い方は栄養表示を見て選ぶ時代であるが、こっそり減塩作戦は、特に表示をせずに行うものであり、難しいのではないか。事業の中で重点的に行う部分と評価の視点について、そして何品程度販売されるのか教えていただきたい。
大泉主査	市民の高血圧症を予防、改善するため、こっそり減塩作戦と併せて、市民を対象に行った調査結果をもとに作成したパンフレットを用いての啓発を行っている。一方で、意識しない方も、知らず知らずのうちに気づいたら減塩していたという環境整備の目的で、こっそり減塩作戦を考えている。販売惣菜の開発については、管理栄養士が対応し、販売手法については、客層や現在の惣菜について感じていることなどを調査し、それらを踏まえてアドバイザーと検討しながら進めていく。今年度中には、一品でも改良した惣菜を販売したいと考えている。
粟生田会長	この取組は、医療分野との連携もあって、初めて成り立つものだと思うのだが、そのような観点で事務局から考えをお聞きしたい。
大泉主査	<p>「減塩の惣菜です」と表示すると、意識の低い人は手を伸ばさない可能性が高いと考えている。減塩という言葉ではなく、例えば「だしたっぷり」や「野菜たっぷり」など、おいしいそうと感じるキャッチフレーズを付けることも視野に入れて検討している。</p> <p>評価について、この取組が市民の塩分摂取量に影響するには1、2年では足りないと考えており、まずは惣菜の売上げが指標の一つになると見込んでいる。パンフレットを活用した啓発も併せて行い、将来的には尿中塩分測定の実施を視野に入れながら、評価方法について検討する。</p>
今井委員	減塩の事業について、“こっそり”はしなくてもよいのではないか。食育基本法にも、食を選択する力を習得し、という言葉がある。健康を考えて、何を選ぶかの教育も大切ではないか。それに、塩だけ減らせば血圧が下がるわけではない。血圧が上がる理由を自身で理解しないと減塩にはつながらない。健康教育に力を入れながら、しっかり目印を付けて、選ばせるということが必要だと考える。
小林委員	なぜ、“こっそり”しなければならないかの説明に、説得力がない。

	進めようとしていることなら、堂々とやるべき。
阿部副会長	市の依頼を受け、保育所等でパンフレットを用いて啓発している。分かりやすい内容で好感触を得ている。惣菜の減塩も堂々とやるべきだと考える。
大泉主査	引き続き、パンフレットを活用して保護者や高校生、多くの市民に啓発をしていく。また、こっそり減塩作成については、本日の御意見を踏まえ、アドバイザーと相談して進めていく。
阿部副会長	<p>～農業部分の質疑及び意見～</p> <p>ボナペティシールは、インショップの品物には貼ってあるが、直売所は貼ってないものも多く見られる。地産地消を働きかける大事なアイテムだと思うので、忘れずに貼ってもらえるように、積極的に声掛けをしてもらいたい。また、シールは野菜と同化しないよう明るい色もあると良い。</p>
藤家農林課長補佐	次年度は、直売所自身がピーアールできる仕組みをボナペティシールに組み込めるよう検討している。例えば、シールにQRコードや検索バーを入れて、直売所のフェイスブックにつながるようにする等を考えている。
高橋敦委員	アグリサポーター事業は、実際に農家に行くまでの間に、事前学習があるのか。それとも、農家からの依頼業務を行うものなのか。
藤家農林課長補佐	事前学習というものは特にない。マッチングの段階で、農家にはどのような方を受け入れていただくかを伝えている。
高橋敦委員	農家も高齢化してきているので、このような事業は、農家にとってもありがたいものだと思う。今後登録者を増やしていくということか。
藤家農林課長補佐 山本委員	<p>計画に対する目標値は32年度に20人としているが、現在28人の方に登録いただいております。今後さらに増やしていきたいと考えています。</p> <p>ボナペティシールの台紙設置が限られた場所しかないように感じる。実際にシールを貼った野菜の販売場所に台紙が置いてあると、活用する人が増えると思うが、現状はいかがか。</p> <p>また、青年就農者育成等支援事業について、県外で募集活動を行っているようだが、市内で手を挙げる人がいないから県外へ出向いてい</p>

<p>藤家農林課 長補佐</p>	<p>るのか。</p> <p>最後に、営農体制の整備事業について、現時点では希望なしという説明であったが、全く希望がなかったのか、条件に合わなかったということなのかを聞かせていただきたい。</p> <p>台紙については、御意見を踏まえ、できる限り活用しやすい体制を検討する。</p> <p>青年就農者育成等支援事業については、当初、関東から三条市に定住させたいという目的で進めていた。しかし、定住が難しいという現状もあり、今年度、三条市近辺の県内で募集活動を行っており、現在研修中の方は、五泉市の方である。</p> <p>営農体制の整備事業につきまして、昨年度末に開催したセミナー後にヒアリングをしていく中で、農業者が求める支援と、こちらが求める利益を追求して雇用していく法人という条件がマッチングしなかったという状況がある。</p>
<p>神田委員</p>	<p>農業経営体質改善取組支援事業について、一番星となる農業者とあるが、実績はどのくらいなのか。</p>
<p>藤家農林課 長補佐</p>	<p>今現在、果樹農家の方を支援しているところだが、実績としては一人である。</p>
<p>神田委員</p>	<p>一番星の定義は何か。支援を受けた人が一番星なのか。</p>
<p>藤澤農林課 長</p>	<p>支援を受けた方が一番星というわけではない。全体の底上げを図って、すべての農業者が、意欲を持って取り組めるよう進めたいと考えておりますが、個々の農業者の考えもあり、難しい部分もある。</p>
<p>小林委員</p>	<p>藤澤課長は、全ての農家に等しく農業施策が行き渡れば良いが、難しいので、一番星を始め、意欲のある人を重点的に支援していくということだが、あくまでも、一人の農業者が自立して、体力を改善していくというように見える。農業政策として条例を作り、農業振興を図るのであれば、農家全体に関わる底上げをきちんと整えた中で、一番星のような事業を行うべきではないか。</p>
<p>藤澤農林課 長</p>	<p>一番星を育てる目的は、一番星に引き続き、二番星、三番星が育つこと。底上げが必要だということは、十分に理解している。しかし、施策として考えたときに、市町村だけでは、非常に難しく、国全体の</p>

	<p>構想で考えるべきことだと捉えている。</p>
神田委員	<p>今の話から、事業として実績が上がってきていないことを見ても、市が取り組む事業ではないというように聞こえる。もう少し実効性のある事業にしていきたい。</p>
藤澤農林課長	<p>私どものアプローチの仕方として、まずは、意欲のある農家に手を挙げていただくということが必要だと考えている。数が多いとか少ないという問題ではないと考えている。</p>
神田委員	<p>この事業が始まって、もう二年になるが、実績に結びつかないならば工夫が必要ではないか。個別支援も、場合によっては市が行うよりもJAが行った方が効果的かもしれない。市で行う以上は、数字で実績の伸びが見えなければ、意味がないのではないか。</p>
金子委員	<p>新規就農事業で、他県から連れてきて育成するというのは、非常に良い取組だと思うが、実際は離農するスピードの方が遥かに速い。それに対する事業は、農業生産法人体質強化事業なので、これにもう少し力を入れていただけると良い。2～3人でもグループになり、例えば機械が購入できる等の支援があると、もう少し粘ることができる。その辺りを優先していただけるとありがたい。</p>
栗生田会長	<p>農業者の高齢化や離農が進む中で、これだという政策は見えてこない状況はよく分かる。厳しいながらも継続し、踏ん張っている農家に行政が温かく手を差し伸べるという方向性で進めていただけると良いのではないか。</p>
星野委員	<p>知り合いで、異業種の法人が農業をやりたいという話がある。そのような方々への支援はあるのか。個人への支援は見えるが、法人への支援が見えないので教えていただきたい。</p>
藤澤農林課長	<p>話があればぜひ相談させていただきたい。しかし、農業政策上、一般法人のあり方としては規制があるため、その辺りを踏まえたうえで、御相談いただきたい。頑張っている農家が、より頑張っていけるように、今後も検討していく。</p>
小林委員	<p>バケツ稲や収穫体験等、食育と農業を結びつけた様々な事業には、一定の評価をするが、参加者が非常に少ないと思う。これでは、農業</p>

<p>長谷川経済 部長</p>	<p>理解は進まないと思う。もう少し大きな規模の事業を展開してはいか がか。以前に、地場産業センターで農業祭があり、農業者と消費者の 交流の場として評価を得ていたので、そのことも視野に入れて、考え ていただきたい。</p> <p>これからは、農業者が経営者になることが求められている時代にな る。市としては、そのような農業者を育てたいという目的で、一番星 事業等を進めている。一方で、地域農業を守るための取組も必要で、 そうすると兼業農家も重要なプレーヤーの一人になる。具体的な施策 としてどのようなものが有効なのかは、引き続き試行錯誤を重ねなが ら、研究しながら取り組んでいく。</p> <p>消費者と農業者の理解の促進はとても大切だと考えている。地産地 消というものは、まだまだ理解されていない部分が多いと感じる。当 たり前に認知してもらおうという状態になることが理想。そこまで至 っていないために、このような理念条例を策定して取り組んでいる。前 回の三条マルシェでも、地産地消の啓発を行ったが、引き続き、農業 者と消費者の相互理解の促進が図られるよう、取り組んでいく。</p>
<p>高橋(敦)委 員</p>	<p>家業で農業を行っている家も多くあると思うが、子どもたちが裸足 で田んぼに入ったり、稲刈りをしたり、新米をおいしく食べたりとい う経験の中から、全く農業に触れることのない子どもたちが興味を持 ち、将来的に農業をやってもいいと感じられるのではと思う。先ほど 生産者の方と給食を通じて交流するというのを伺ったが、農業体験 を通じて生産者と交流することでいろんな経験が出来ると思うが、三 条市ではそういった取組を小中学校で何か行っているのか。</p>
<p>藤家農林課 長補佐</p>	<p>三条市では全小学校 20 校中の 18 校が毎年学校教育田活動を行っ ている。残りの 2 校については、実施する年度としない年度がある。活 動の中では小学校 5 年生を中心に田植えや稲刈りをして、収穫したも のを指導してくださった農家の方を呼んで収穫祭のようなことをして いる。小さい学校であれば、5 年生だけでなく全校児童で行事として 収穫祭を行っているというような状況。</p>
<p>高橋(豊) 委員</p>	<p>学校では田植えや稲刈りといった体験活動を行っているが、実際に 農業に関わった方や給食に食材を提供している方から話を聞くことが 大切だと思う。そこに保護者や地域の方を巻き込んでいけたら良いが、 現場ではまだそこまで至っていない。JA の広報誌等で子どもたちの取 組を取材していただき、それを読んだ保護者の方から学校へ感想を募</p>



高橋(敦)委員	<p>ると保護者や地域を巻き込めると思う。学校としてはそういった取組を充実させていきたいと考えている。</p> <p>JAとしても現在、若い職員たちが紙芝居などを作って出前授業を行っている。依頼があればいつでも出向きたい。</p>
粟生田会長	<p>行政とJAがタッグを組んで、子どもたちの心に農業の種が広がっていくのではないかと思う。学校田について、20校中2校が毎年実施していないということだが、担当する先生方の心意気なのか。農業は一口に業というだけでなく、心を作り、体を作り、地域を作りということにつながり、教育現場に農業を投入する意味は非常に高いものがある。そういった観点からも、農業体験を行う学校が増えていくよう徹底してもらいたい。</p>

エ 成果指標の目標値の設定について（資料No.4, 5を確認いただく）

山本委員	<p>資料No.4の米飯食の推進の指標項目である朝食の主食に米飯を食べる人の割合の5歳児のところ、H28年度で減っているのは何か原因があるのか。</p>
大泉主査	<p>はっきりとした原因がまだつかめていないが、保育所の5歳児で下がってきていることから、3、4歳児の保護者講話での啓発を強化していきたい。</p>
神田委員	<p>小学校5年生、中学校1年生、40才以上といった数値は、全数調査なのかそれともサンプリング調査なのか。</p>
大泉主査	<p>小学校5年生、中学校1年生については全数調査、40才以上につきましては、検診時のアンケートと保育所、小学校の保護者にもアンケートを併せた数値になっている。</p>
宮島委員	<p>資料5について、実現可能な数値を見込んでの設定でよいかという事が一つと、箸が正しく持てる児童の割合の現状値が25.7%と低いと2%の増加で良いと考える理由について聞かせいただきたい。</p>
大泉主査	<p>目標値設定の理由は、事業の実施状況やこれまでの取組の中で数値をとっているものがあるので、それを踏まえて実現可能な目標設定としている。「箸が正しく持てる児童の割合」について、現場で指導</p>

	している中で、年々箸を正しく持てる児童が減ってきていると感じておりその現状を踏まえた数値設定となっている。
--	-------------------------------------------------------

(5) その他（長谷川健康づくり課長）

来年度以降の審議会は5月及び10月に開催予定

6 閉 会 午後3時42分